

# 誰かに教えたくなる 科学技術の話 76

## 実現された 「ユートピア」



東京大学名誉教授 月尾 嘉男

どのような時代にも人間は生活している環境に不満があり、理想の社会を憧憬してきた。すでに古代ギリシャの学者プラトンは著書『テマイオス』で、大西洋沖に理想国家アトランティスが存在したが、一万年近く以前に水没したと記述している。しかし「存在しない場所」という意味の「ユートピア」という言葉で理想社会を提起したのは十六世紀のイギリスの官僚で作家のトマス・モアである。

### モアの「ユートピア」

今回は表題のように実際に建設され短期にしても実在したユートピアを紹介する。ただしモアは現実の理想都市を建設したわけではないが、「ユートピア」という言葉を提起した人物として最初に紹介しておきたい。モアは一五〇四年にイギリスの下院議員に選出され、チューダー王朝の国王ヘンリー八世に出仕して順調に出世し、一五二九年には官僚として最高の地位の大法官に就任している。

この十六世紀前半はドイツでマルティン・ルターが主唱する宗教改革が発生した時期で、それに触発されたモアは私有的概念のない社会、玄関に施錠しない安全な社会、六時間労働の社会、奴隷不在



図1 トマス・モアの「ユートピア」

の社会、外国と同盟しない国家、戦争を憎悪する国家など、当時の社会とは真逆の状態を理想社会として提唱する『ユートピア』という著作を一五一六年に発表した(図1)。

この著書は問題にされなかったが、ヘンリー八世が最初の夫人キャサリン・オブ・アラゴンと離婚し、その侍女アン・ブーリンと結婚しようとしたがカソリック教会が許可しなかったため、ヘンリー八世はカソリック教会と断絶し、独自にイングランド教会を設立するという事件が発生した。これに反対したモアは幽閉され死刑となった。現実の社会はユート

ピアになりえなかったのである。

### 完璧な要塞都市「パルマノーヴァ」

日本の城下町と西欧の要塞都市は都市を防御するという意味では目的は類似しているが、最大の差異は前者が城郭だけを防御する構造であるのに対し、後者は都市全体を防御する構造を構築していることである。西欧の要塞都市は古代から数多く建設されてきたが、見事に建設当時の面影を維持している一例がベネチア共和国に建設され、現存する「パルマノーヴァ」である(図2)。



図2 パルマノーヴァ

十六世紀後半、ベネチア共和国はオスマン帝国からの攻撃の脅威に直面していた。そこで国土の東側の防御のため、国境付近に要塞都市「パルマノーヴァ」を建設した。正九角形の城壁の外側には星型に突出した掘割が掘削されて防御を堅固にし、内側の中央には軍隊の駐屯場所があり、どの方向にも放射状の通路が用意され、攻撃された方向に兵士が即座に移動可能になっている。

この完璧な防御体制は敵軍の攻撃意欲を消失させ、パルマノーヴァは一度も攻撃されることがなかった。巨額の投資の効果があったことになる。この形状の要塞都市はヨーロッパ各国が参考にして多数が残存しているが、有効に活用したのがフランスのルイ十四世の配下のセバスティアン・ド・ヴォーバンで、フランスに約一五〇の要塞を建設するとともに城塞攻撃の名手ともなった。

### 理想の工場都市「ニューラナーク」

スコットランドの中央に位置する人口一万人弱の都市ラナークからクライド川沿いの約二キロ上流に約二〇棟の煉瓦の建物が存在する。「ニューラナーク」の紡績工場と集合住宅の遺構である。当時



図3 ニューラナーク

の織機は水力駆動であったため水量豊富な川沿いに建設された施設である(図3)。一七八六年に建設され一九六八年まで操業していたが、保全トラストが設立されて現在も施設が維持されている。

この施設はスコットランドの地主のデヴィッド・デイルが建設し、その娘婿で社会改良主義を推進して有名になるロバート・オウエンが継承し、ユートピア社会主義を実現していた。そこには周辺の地域約一三〇〇人の大人と五〇〇人程度の子供が雇用され集合住宅で生活していた。当時としては普通で、子供も一日

一二時間以上の労働をしていたが、幼児学校が用意されて教育も享受できた。

産業革命時代の過酷な労働条件と比較して職住一体の斬新な施設運営は話題になり、ヨーロッパ各地から王族、貴族、役人、企業関係の人々が見学に来るするほどの施設になっていった。一九六八年に工場が閉鎖されてからも二〇〇人程度の人々が歴史景観を維持しながら生活しており、二〇〇一年には世界文化遺産に登録されたこともあり、毎年四〇万人の人々が来訪する名所となっている。

### 車両会社が建設した「プルマンタウン」

北米大陸に最初の鉄道が敷設されたのは一八三〇年であるが、以後、急速に拡大して六九年には太平洋岸まで到達する北米大陸横断鉄道が実現した。当時の鉄道旅行は何日もかかる移動であり、それに対応して一八三〇年代の最後には寝台車両、六〇年代には食堂車両が登場した。これらの車両を建造し、運行したのが一八六二年創業のプルマン・パレス・カー・カンパニーである。

創業したジョージ・プルマンはシカゴを本拠とし、都心から二〇キロほど南側に一六平方キロもの広大な土地を購入し



図4 プルマンタウン

て「プルマンタウン」を建設した(図4)。工場とともに約六〇〇〇人の社員と家族のための住居だけではなく、来客が宿泊するホテル、社員が利用する商店、教会、娯楽施設なども用意し、社員はそこに居住することを義務とされるとともに禁酒を強要された。

一見、ユートピアのようであるが、安価な賃金、高額の家賃のため生活は困窮し、一八九三年の史上最悪とされる恐慌が到来したときにも、会社は社員の解雇、賃金の削減、労働時間の延長で対応したため、翌年、社員の不満が爆発し、アメ

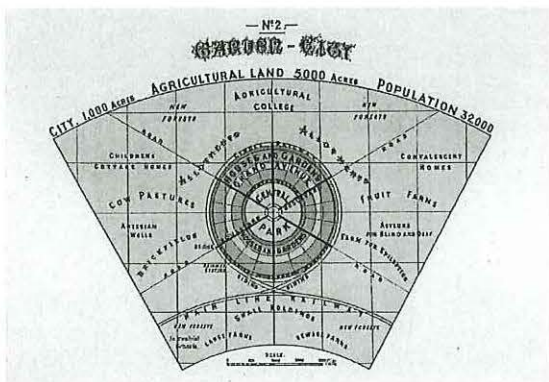


図5 ガーデンシティ構想

### ハワードの「田園都市」(ガーデンシティ)

イギリスでは十八世紀後半から産業革命が進行し、人口が急速に農村から都市に集中するようになった結果、人々は自然から隔離された劣悪な環境で高額の家賃を支払って生活する状況になった。そこで社会改革や都市計画の仕事をしてい

たエベネザー・ハワードが一八九八年に都市の利点と自然の利点の両者を享受できる環境を「明日の田園都市」という名前で提案した(図5)。

これは「都市と自然の結婚」という標語が象徴するように、二〇〇〇ヘクタールほどの農地の中央に四〇〇ヘクタールほどの都市を建設し、約三万人の人々が自然の豊富な環境で生活するという構想であった。安価に購入した農地を整備して土地を住民に賃貸し、その賃貸料金で都市を維持し、上昇した地価は都市全体の発展に投資していくという事業計画も発表された。

この構想は多数の人々に支持され、ハワードは田園都市協会を設立して、実際にロンドンの都心から五五キロほどの位置にあるレッチワースに農地を購入して理想の都市を建設し成功した。田園都市は膨張するロンドンの都市問題を解決する手法として評価され、戦後になりロンドン周辺に三〇以上の田園都市が建設され、ヨーロッパ、アメリカ、さらには日本にも波及した。

### 砂漠に実現した「アーコサンティ」

ヨーロッパから遠望すると北米大陸に

は広大な未開の土地があり、理想都市を実現する絶好の環境であった。ニューラナークを運営していたオウエンは離反する人々が増加したため、一八二五年にアメリカのインディアナ州に「ニューハモニー」という理想社会を建設しているし、自然エネルギーの推進をしてきたエモリー・ロビンスはコロラド州にロッキーマウンテン研究所を設立している。

イタリア人建築家バオロ・ソレリは「アーコロジ」(アーキテクチャ+エコロジ)という概念を提唱、その実現のためアリゾナ州の乾燥地帯に広大な土地を購入し、一九七〇年代から「アーコサンティ」という目標人口約五〇〇〇人の理想都市の建設を開始したが、作業はソレリの思想に共鳴して世界各地から到来する人々のボランティア活動に依存しているため遅々たる進行である。

一九七〇年から土地の造成が開始され、これまでの五〇年間で一〇以上の建物が実現しているが、最終目標の五%しかない(図6)。しかし、広大な砂漠の一角で、至近距離にある都市フェニックスからでも一〇キロもある不便な場所に毎年六万人近くの人々が見学に訪問してくる。ユートピアの実現のためには人々



図6 アーコサンティの遠景

を魅了する強烈な理念が必要であることを証明している。

人生が自分の願望のように展開することとはありえない。数多くの失望を克服しながら生存するのが人間の一生であるが、その願望を一部でも実現したいと発想した環境がユートピアである。大半のユートピア構想は願望で終了しているが、大胆にも実現した人々の歴史を紹介したのが今回の六例である。世界が巨大な転換を開始している方向の行先を思考する参考になれば光栄である。